

現代台湾にとっての中華民国史とは？ —台湾における中華民国档案（公文書） の保存・公開状況から考える

山本 真

歴史・人類学系講師

I はじめに

近年台湾では中華民国の「台湾化」が急速に進んでいる。周知のように、第二次大戦終結以降、大陸から移ってきた中国国民党政権による独裁的な統治が行われてきた。しかし、80年代末に本省人である李登輝が中華民国総統・中国国民党主席に就任すると、政治的民主化とともに台湾人意識の育成が強力に推進されることとなった。例えば、90年代後半には中等教育における初めての台湾史の教科書である『認識台湾』歴史編（台湾を知ろう）が発行された。また各県や郷鎮では自らの地方の郷土史編纂に力が入れられ、幾つかの大学には従来なかった台湾史の講座が開設されることとなった。さらに現在では各大学の大学院で毎年大量に生産される修士論文においても、中国近現代史（特に中華民国史）を扱った研究の占める割合は急速に低下し（例えば孫文研究などはほとんど皆無である）、

その反面台湾近現代史を扱った論文が急増する傾向にある。こうした教育と歴史研究の「台湾化」の結果、国民党独裁時代に形成された「大陸時代を含む中華民国史」＝「国史」といった構造は解体に向かいつつあるといっても過言ではなからう。

筆者は中国・台湾近現代史、特に中華民国史及び中国国民党史を専攻しており、1994年以来ほぼ毎年台湾に赴き、台湾の諸研究機関に所蔵されている関係資料の収集に努めてきた。小稿では中華民国の「台湾化」を档案（公文書）の保存・公開状況の変貌という視角から考えてみたい。

II 台湾における中華民国档案の公開状況

台湾における中国近代史関係の档案史料は主に国立研究機構である中央研究院近代史研究所の档案館、そして国史編纂機関である国史館、中国国民党の歴史編

纂部門である中国国民党党史委員会（以下党史委員会と略記する）に分散所蔵されてきた。台湾における民主化が進み、外国人研究者もこれらの檔案史料を比較的容易に閲覽することができるようになった90年代以降、若手を中心に多くの日本人研究者が台湾に赴き資料調査を行うこととなった。筆者自身は修士課程の院生であった1994年に資料収集を開始した。この当時公開されていたのは主に大陸統治時期の中華民国政府の檔案であり、各機関の責任者の許可がなければ閲覽が許されないなど細かい規制も多かった。それから現在まで9年の歳月が流れたが、この間にもこれら各機関における檔案の保存・公開状況は極めて大きく変化した。全体的傾向としては、李登輝政権後期（90年代後半）以降、情報公開が進展したことにより、戦後台湾時期の政府檔案の公開が急速に進められた。また、中国大陸統治時期の中華民国・国民党檔案の機密性はほとんど無くなり、自由な閲覽が可能になった（従来タブーの多かった蒋介石の個人檔案ですらほぼ全面的に公開されるようになった）。

また檔案史料の整理公開や史料集の出版においては「台湾化」の傾向が顕著である。例えば、總統府直屬の国史編纂機構である国史館は主に大陸時期の中華民

国檔案の保存・公開、史料集の編纂・刊行を業務としてきた。しかし陳水扁政権（台湾土着政党である民主進歩党出身）が成立すると、その館長には台湾史の研究者が任命され、台湾近現代史関連の史料の出版に重点が移されることとなった（例えば『戦後台湾民主化運動史料彙編』や『台湾主権論述資料選編』など）。残念ながら本稿では紙幅の関係で国史館や中央研究院近代史研究所での檔案公開状況の変容を詳しく取り上げることはできない。以下では檔案を保管している主要機関のなかで、「台湾化」の衝撃を最も直接に被わり、規模の大幅な縮小を迫られた国民党党史委員会の状況に焦点を絞り、その実情を紹介していきたい。

Ⅲ 中国国民党党史委員会の規模縮小と史料保存・閲覽状況の悪化

党史委員会は中国国民党の史料編纂部門であり、国民党檔案の保存、史料集の編纂・発行をその事業としてきた。同会が所蔵する史料のうち檔案史料、そして内部発行の油印本、大陸時期の新聞・雑誌は台北市北郊の陽明山中にある蒋介石の元別荘陽明書屋に、刊行物については台北市内の國父紀念館に併設された党中央委員會圖書館に分割保管されていた。筆者が初めて陽明書屋を訪れた1995年当

時、該所所蔵の史料閲覧のためには、予めしかるべき人物の紹介が必要であり、また建物も高い塀に囲まれ、憲兵などの警備人員により警護されるなど、政権党＝国家である国民党の文書館としての威厳が感じられたものである。

その後、国民党中央党部ビルが台北市の中心に新築されると、党史委員会も1998年に中央党部ビル内へと移転した。移転後の党史委員会では、写真展示など国民党史についての宣伝に中心的スペースが割かれ、檔案の閲覧室は展示場の一隅に押し込められてしまった。その反面、史料閲覧のための交通の便はよくなり、また身分証の提示だけで入館できるようになったこともあり、以前より気楽に檔案の閲覧ができるようになった。概して執政党の文書館としての権威主義的雰囲気は一掃されたのである。なお、この時期党関係史料の公開状況は一層進展し、党の最高意思決定機構である中央常務委員会の会議記録ですら、1960年代のものまでが閲覧可能となった。このように李登輝政権末期までの党史委員会の変貌は、研究者の史料閲覧にとってプラスに作用していたと考えられる。

しかし、その後2000年の総統選挙において民主進歩党の陳水扁が勝利し、国民党が野党に転落すると、国民党関係資料

の公開状況は一転して悪化することとなった。それは①野党化した国民党の財務状況が悪化し、党史委員会などの地味な部門を維持することが困難となった、②現在の党首脳部が党の歴史を重視しなくなった、という二つの要因のためである。従来、国民党は党営企業をもち、世界一の金持ち政党といわれてきた。しかし、陳水扁政権は政党のビジネスへの関与を禁止する方針を打ち出し、国民党側も党営事業の信託化を進めざるを得なくなった。しかし、昨今の経済危機により国民党資産は大幅に目減りしたと聞き及ぶ。この結果、不採算事業の再編成が進められることとなり、従来、国民党中央委員会に直結していた党史委員会は、党中央文化伝播委員会下の歴史史料の展示室に格下げされることとなった。これは当然、檔案の保管と史料編纂・出版などの従来の学術的機能の大幅な低下に繋がることとなり、内部の専任研究者も外部に流失した。また、その学術定期刊行物も2002年末で停刊した。さらに悪いことには国父記念館に併設されていた中央委員会図書館も昨年の夏から閉鎖状況となっている。政府機関である国父記念館から一野党に過ぎない国民党の図書館が追い出されたというのが実情であろう。これにより同図書館所蔵の資料は閲覧不

可能となり現在に至っているのである。こうした党史委員会の惨状は中華民国史研究（中国近現代史研究）にとって大きなダメージであるばかりでなく、戦後台湾史研究にとってもゆゆしき問題である。なぜなら国民党は戦後台湾において50年以上も執政党の地位にあり、党史委員会には戦後台湾史に関する重要史料も大量に保管されているからである。

IV おわりに

以上のように小稿では台湾の公的機関における档案の保存・公開状況の変貌を簡単に紹介してきた。こうした現象からも、現在いかに急速に「台湾化」すなわち中華民国アイデンティティーの意識的

解体または無意識的忘却が進行しているのかが窺われよう。もちろん来年3月に行われる次期総統選挙の結果、国民党側が勝利すれば、こうした潮流には、多少ブレーキがかかる可能性はある。しかし、その場合でも与党に再び咲いた国民党が、戦後台湾における国民党の貢献を強調できるような档案の保存・出版を再び重視することはあっても、大陸時期の中華民国や中国国民党档案を再び重視するとは思えない。皮肉なことに現在の台湾では、大陸から渡って来た国民党自身が、「中華民国アイデンティティー」の忘却を無意識的に促進しているのである。

（やまもとしん 中国・台湾近現代史）

